

練習船大成丸

に便乗して

東京女子高等師範學校訓導 田代順之

横濱出帆

待望の南洋航海出帆の日が来た。午前九時横濱の一號岸壁へかけつけると大成丸は長途の旅装を整へ悠然と横づけになつてゐた。掛橋を登つて上甲板で兼て見知りの當直士官に挨拶し、船内の案内も多少分つてゐるから直ぐ中甲板に降りて教官の食堂で少憩の後、私共の居室に當てられた左舷中甲板略々中央の一室を覗いて見た。東京港沖で見たよりも船内全體が綺麗に清掃されてゐて如何にも氣持がよい。廳で浦岡一等運轉士から同行の便乗者山口高商の中川秋穂氏、弘前中學の高橋正雄氏に紹介していき、お互になごやかな挨拶を取り交

はし、案内されて居室へ這入つて見たが、午後二時の出帆を控へてその前に、出帆祝賀式とでも言はふか觀送式とでも言はふか、兎に角文部大臣代理實業學務局長の訓辭、海軍大臣代理教育局長の訓辭、權須賀砲術學校長の祝詞、高等商船學校長の訓辭、淺井船長の祝詞といふ次第で式が取行はれるといふので、生徒も作業服を制服に著替へて來賓奉迎の準備をする。十一時頃には一般の見送り人もぞん／＼乗船する。船の中はなか／＼の混雜である。私共も一般の見送人同様甲板上をウロツいても見た。そして僕も此の船で遠洋航海に旅立つんだと人にも知つて貰ひ度いやうな雅氣さへ感じ

た。併し未だ荷物が運んでないのだから何となく落付けない。促されて居室でチキンライスを勿々に掻込み、再び甲板上へ出た。來賓が次々と見える。教官生徒一同整列舉手の禮で迎へる。式は零時四十分から上甲板で嚴肅に取行はれ一時半終了。一般見送人は遂次下船。來賓は祝杯を舉げられたのであらう、程良い御氣色御機嫌で二時寸刻前下船、船は直ぐに纜が解かれて靜かに岸壁を離れ出した。月島からも横須賀砲術學校からも後輩が其の壯途を見送りに大勢來てゐた。客船の出帆と異つて五色のテープを流すといふやうな華かさとか賑はしさとか、なまめかしさとかいふ風景は見られず、所謂練習船獨特な素朴さと明瞭さを感得する事が出來た。海國日本の中樞を構成する高等船員の卵の孵化過程だ。離れ行く船と陸、シキリに交される「カンパレー」の雄叫も元氣に満ち／＼と、意氣に燃える彼等には殊に相應はしい挨拶である。見送側の生徒の一部は五六雙のランチに分乘して港の入口までやつて來て見送つて呉れた。船はパイロットに導びかれて港外へ出た。海は靜穩で誠に氣持がよい。一筋に大

洋へ向ふかに見えた船はしばらくすると大轉廻を始めた。何分汽走でも六ノットといふ現代のスピード文化を超越して悠然と構へてゐる道場船だ。廻轉には直徑一哩以上の幅員を要するといふ此の道場船で悠揚迫らざる大船長が育成されるのである。併しかうしたノロイ船なればこそ自然力に影響される事が大で、細心の注意と即時の身體的活動が要求される。帆走時に於て特に道場船の眞面目を見る事が出来る。船の軸先に起伏する東京灣岸の山々は除るに廻つて船は本牧沖に錨を下した。短い冬の日はまだだしく暮れて、灣岸一體には電燈の灯が堵列して冴え輝いてゐる。今夜は此處で一泊明朝未明に出帆の豫定。

遠洋航海豫定

(1)航海日程：第六十次遠洋航海日程は次の通りで、實際も之と殆ど一致してゐる事は如何に數十回の經驗の結果とは言へ驚く外はない。一晝夜で十數哩しか進まないといふやうなほどかしい日もあつた。船側へ浮游物を投じて船の速力を調べて見ると其の浮游物が何時迄も船側の波間に漂ひながら行きつ戻りつして氣の苛立つ時もある

つた。進んでも進んでも直徑十二哩の圓盤の中央に据置かれてゐる船、果して順調なる進路を辿つてゐるのであらうか？ふと

練習船大成丸第六十次遠洋航海豫定表

港名	入港月日	出港月日	碇泊日數	航海日數	航程(哩)
東京	一月九日	一月九日	三	一	一五
横濱	一月十日	一月十二日	三	二	一五〇〇
トラツク	二月五日	二月十二日	七	七	二五〇〇
サイパン	二月十八日	二月二十二日	四	四	六五〇
鹿児島	三月八日	三月十一日	三	三	一五〇〇
上海	三月十六日	三月二十三日	六	七	六〇〇
神戸	三月二十九日	四月二日	四	三	八二〇
鳥羽	四月四日	四月七日	三	二	二一五
横濱	四月八日	四月八日	一	一	一八五
東京	四月八日	四月八日	一	一	一五
計			三八	六〇	六五〇〇

コンパスを覗いて見ると、針が途方もない方向を指してゐることさへあつた。それで、長期に亘る豫定の航行が遂行されるの

直士官の指揮命令のもとに船の運轉操作に關する事務作業一切の任に當るもので、五十名の生徒が四ヶ分隊に編成され、四時間

であるから驚かされるのである。(2)日課：船内生活は大體次の日課表に準じて行はれるのであるが、當直とは當

(括弧内は實際の航海)

(海航洋遠十六集) 表 課 日 海 航

時間	事項	場所	備考	日
午 前	當直交代 當直船内掃除	同		日
四〇〇	當直交代	同		日
七〇〇	總員起床	同		日
七一五	食事用意	同		日
七三〇	當直事務止め	同		日
八〇〇	非番直食事	同		日
八七五	當直交代	同		日
九〇〇	前直食事	同		日
九〇〇	事業整列	同		日
九〇〇	學習始め	同		日
一〇〇	甲板掃除	同		日
一〇五	點檢用意	同		日
一三〇	船内點檢	同		日
一三五	學習止め	同		日
一五〇	食事用意	同		日
一五〇	大掃除止め	同		日
一五〇	非番直食事	同		日
一五五	天測員整列	同		日
二〇〇	當直交代	同		日
二一五	前直食事	同		日
二二〇	事業整列	同		日
二三〇	學習始め	同		日
二四〇	甲板掃除	同		日
二四五	點檢用意	同		日
二五〇	船内點檢	同		日
二五〇	事業學習止め	同		日
二五五	軍事點檢	同		日
三〇〇	乾燥取込め	同		日
三〇〇	甲板掃除	同		日
三一五	學習止め	同		日
三二〇	事業整列	同		日
三三五	各部要員器具整頓	同		日
三四〇	天測員整列	同		日
三四〇	當直交代	同		日
三四〇	食事	同		日
三五〇	食事交代	同		日
三六〇	音樂運動遊戯止め	同		日
三七〇	甲板掃除	同		日
三七五	器具點檢巡檢用意	同		日
三八〇	當直交代巡檢	同		日
三九〇	消燈	同		日
四〇〇	當直交代	同		日
四一五	當直交代	同		日
四三〇	當直交代	同		日
四四〇	當直交代	同		日
四五〇	當直交代	同		日
四六〇	當直交代	同		日
四七〇	當直交代	同		日
四八〇	當直交代	同		日
四九〇	當直交代	同		日
五〇〇	當直交代	同		日
五一〇	當直交代	同		日
五二〇	當直交代	同		日
五三〇	當直交代	同		日
五四〇	當直交代	同		日
五五〇	當直交代	同		日
五六〇	當直交代	同		日
五七〇	當直交代	同		日
五八〇	當直交代	同		日
五九〇	當直交代	同		日
六〇〇	當直交代	同		日
六一〇	當直交代	同		日
六二〇	當直交代	同		日
六三〇	當直交代	同		日
六四〇	當直交代	同		日
六五〇	當直交代	同		日
六六〇	當直交代	同		日
六七〇	當直交代	同		日
六八〇	當直交代	同		日
六九〇	當直交代	同		日
七〇〇	當直交代	同		日
七一〇	當直交代	同		日
七二〇	當直交代	同		日
七三〇	當直交代	同		日
七四〇	當直交代	同		日
七五〇	當直交代	同		日
七六〇	當直交代	同		日
七七〇	當直交代	同		日
七八〇	當直交代	同		日
七九〇	當直交代	同		日
八〇〇	當直交代	同		日
八一〇	當直交代	同		日
八二〇	當直交代	同		日
八三〇	當直交代	同		日
八四〇	當直交代	同		日
八五〇	當直交代	同		日
八六〇	當直交代	同		日
八七〇	當直交代	同		日
八八〇	當直交代	同		日
八九〇	當直交代	同		日
九〇〇	當直交代	同		日
九一〇	當直交代	同		日
九二〇	當直交代	同		日
九三〇	當直交代	同		日
九四〇	當直交代	同		日
九五〇	當直交代	同		日
九六〇	當直交代	同		日
九七〇	當直交代	同		日
九八〇	當直交代	同		日
九九〇	當直交代	同		日
一〇〇〇	當直交代	同		日

動運員總開分十四りよ時三後午 りあとこふ行な檢點の他其品具屬所 施實練操後午はくし若前午日躍水(1) 考備
 (日三十月一年五十九和昭) ふ行な檢點長船日躍土(2)

交代で晝夜の別なく勤務するものである。

事業とは船内全部のペイントの塗換や帆の修繕を始めとして船の運轉直接の仕事以外の作業全部を指す。全生徒は當直以外に毎日必ず二時間十五分の事業と二時間半の學習をしなければならぬことになつてゐる。即ち午前作業したものは午後學習（授業）し、午前學習したものは午後作業するといふ工合に折半されてゐる。天測員整列とは生徒の分隊が交互に船の位置を知るために太陽の高度を測る實習を課せられ指導を受ける事であつて、朝夕の天測によつて經度を知り、正午の天測によつて緯度を知るのである。

水曜日に於ける操練は消防演習乃至避難演習が主であつた。避難演習は非常合圖により、既に定められた部署につき短艇をおろしそれに分乘して、母船より避難するのである。總員が甲板上に臨時假士俵をつくり、或は壘を敷いて相撲、柔道、劍道、體操等を行ふものである。かくして練習船は普通の客船等と全く趣を異にして娯樂の設備など殆んど皆無と言つてよい。精々日曜の晝間、レコードを鑑賞し得る程度に過ぎず、後は休憩時に手製の輪投に興する位

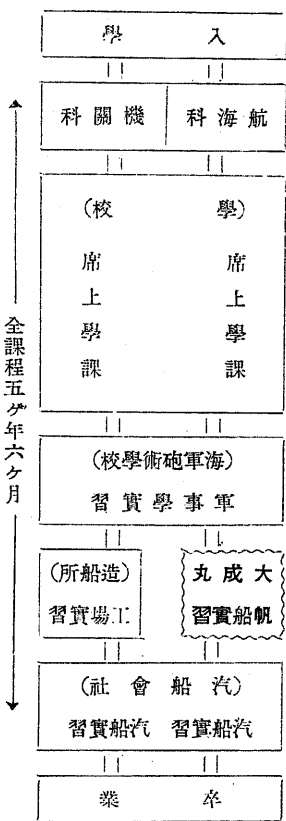
が關の山である。筋肉作業が猛烈である上に、勉強もしなければならぬ。臨時の雜用もある。さうのんびりした娯樂などに興する暇がないと言つた方が寧ろ適當かもしれない。練習船は純然たる船學校である。船長を始めとして士官は全部東京高等商船

三ヶ年

六ヶ月

一ヶ年

一ヶ年



學校の職員ではあるが、直接學校とは關係なく、航海中は勿論のこと歸帆艇泊中と言へども終始船中で生徒を指導するものである。

序に高等商船學校修業の課程表を掲げて見よう。

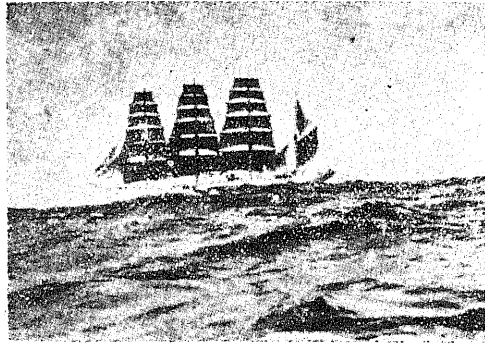
操帆作業

（一）船の梗概 帆走中の船の外形は繪の

様であるが、その梗概を表示すると次の通りである。（次頁参照）

（二）操帆作業 二十六枚の帆、それを操るための綱の延長十二米餘、といふ事からだけでも、如何に操帆作業が繁雜多忙のものであるか、想像されるであらう。時々刻々に變化する風向、風速、波浪の間に處して目的地へ辿るのであるから、今回の如く横濱トラック航行二十四日間も時化て、船體が二十度乃至は三十度も傾斜して波浪に翻弄されると、愈々以て操帆作業が目苦しい程多忙を極めるのである。帆が二十六枚あるからとて餘程の順風でもなければ全部を舉げる事はない。ある帆を上げたと思ふと

他の帆を下し、あの帆を下したと思ふとこの帆を上げる。その帆の上げ下げが實は大變なのである。檣の一番上の帆の横木は海面上百尺、丸の内ビルディング八階の屋上に



—大成丸—

も匹敵する高さである。然るにその帆の上げ下げの度毎に綱梯子を攀ぢ上り、上げた帆を一々横木にくくりつけ、或は横木にくくりつけてある帆を解いて帆を下げる。勿論帆を横木にくくりつけたら、解いたりす

る場合は数人で行ふのであるが、或者は横木の先端まで行つて作業しなければならぬ。而もそれが固定したものについてならばいざ知らず、前記の如く船が十三秒位の周期で二十度乃至三十度のローリングをする時でも、さうした作業が行はれるのであるから、全く輕業師以上の難作業である。かて、加へて深夜であらうが、風雨であらうが、それにはお構ひなしに行はれるのであるから意想外の修養を要する譯である。颯爽たる高等船員の孵化過程に於ても如上の難澁がある事を紹介して置かう。勿論如上の苦難が航海生活の全部ではない。順風に滿帆を孕ませているか飛ぶ紺碧の大洋を快走する愉快さと言つたら經驗者ならで味はひ得ない部面もある。左に大成丸の歌を紹介して筆を擱かう。

首途の歌

- (一) 麗はしの日よ 今日の佳き日
潮の香りに 心は酔ひぬ
あゝ氣も朗ら 空晴れ渡る
(二) 麗はしの日よ 今日の佳き日
鷗は舞ふよ 檣の先端を

今日は首途に 幸あれかし

歸帆の歌

- (一) 空は 高く晴れ渡る
白雲は輝く搖ぎなき風の力に
おゝ眞白の翼も心よく張りて
ヘガサスの空を行くこと
船足も輕く

我船は駛るよ おゝ大成

(二) 海を 越えて故郷の

静かなるいぶきは 口笛の如く
過ぎ行く
おゝ今日こそ歸りこし 喜びは胸に

関は口にあふるゝ杯をあげて
高らかに讃えむ おゝ大成